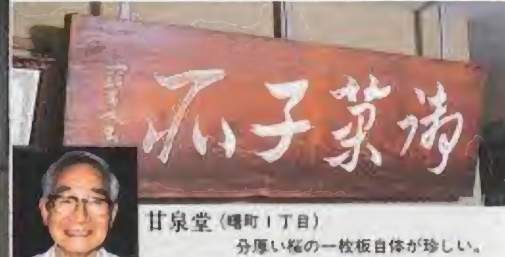
「まい あーと・水彩画「ヨット」by 田中孝一

立川 看板集

わが「えくてびあん」は別に「看板」にこだわっているわけではない。が、「看板娘」を取材しているうちに、本物の「看板」が目について仕方がないのだ。さりげない看板のようでいて、ようく視ると風格高い篆刻であったり、古材が見事に店の性格を表現していたり。なかには「看板」はおろか「店名」もなしで、堂々、店を張っている「おおもの」ぶり。さすがあ、「わが街」立川ですなあ。

[illegible]（曙町1丁目）

奈登利（羽衣町3丁目）　ご主人の長島さんは生粋の江戸っ子。店全体を江戸の粋な造りにした。看板にも情緒あふれる。

望仙閣（柴崎町1丁目）　格調高い篆刻は昭島の中村半左エ門さんの作。古風な店の佇いに良く調和している。

甘泉堂（曙町1丁目）　分厚い桜の一枚板自体が珍しい。

小室園茶舗（柴崎町2丁目）　大切に店内に掛けてある中村半左エ門さんの篆刻。

農友印刷（錦町2丁目）　古いようだが取付けてまだ8年しか経っていない。雨戸2枚の廃物利用とは思えない風格がある。

加藤シート店（羽衣町1丁目）　岡野自転車店（柴崎町1丁目）

フジ自動車商会（幸町1丁目）

長島ネーム刺繍店（高松町1丁目）

高尾亭（錦町5丁目）　将棋の駒で有名な山形県の天童でわざわざ彫ってもらった一品。

輪輪館（柴崎町1丁目）　本物の自転車を載せたのは社長のアイデア。遠くからも目立つ。

自然食の店「ぱれあな」（高松町2丁目）　石田さん（オーナー）の友人達が造った店だけに手作りの良さがある。

たちかわ歴史散歩道

〜砂川の巻〜

身近かな「小さな旅」に出てみませんか。

特に市の南側におられる方は、「砂川」方面の土地カンに疎いようです。それだけに、風景も新鮮に映ろうというもの。

昨年、本誌が連載した「歴史のひとこま」をたずさえてゆくもよし、現在連載中の「立川のモニュメント」も役立てて下さい。

この夏休み、麦わら帽子をかぶって、ぶらり「歴史の旅」に出掛けてみませんか。

バスで砂川二番か砂川四番で降りる。このバスは立川駅北口・高島屋前の1番か2番乗り場に来る。立川バスの11から15番のバスだ。砂川四番までだと立川駅から料金は一七〇円。砂川四番で降りると目の前が阿豆佐味天神社だ。

古くから砂川の鎮守として祀られている。現在の本殿は二百八十年ほど前に修復されたもので市内では、諏訪神社の本殿に次ぐ歴史を持つ木造建築物。氏子は砂川地区全域に及ぶ。大みそかから元旦にかけて「かがり火」がたかれる。9月15日が秋祭り。また境内に絹糸の原料をつくる蚕の守護神である蚕影様をおまつりしている蚕影神社が合祀されている。宮司の宮崎糺さんは考古学者。歴史についてもおもしろい話を聞かせてくれる。

阿豆佐味天神社のなめ向いの靴店の五日市街道ぞいに庚申塚がある。傷み具合から古そうだ。

さらに西に五日市街道を行くと左側に「魚辰」という魚店がある。砂川でも古い店だ。この店の裏あたりにかつて「まいまいず井戸」があったと言う。名前のとおりカタツムリのように螺線の道がついたすりばち状の井戸だ。残念ながら今はその形跡はない。ここにあったと語られているが、その実物を見た人はすでにいない。

さらに西に行くと砂川三番の交差点がある。ここを右に曲って三分ほど歩くと玉川上水にかかる金比羅橋がある。数年前に施した桜の透かしが美しい。村山方面に橋を渡ると左側に「馬頭観音」が祀ってある。街道の安全を祈る気持ちが素朴に表われている。昔からあったものが戦後の混乱期になくなり、その後街道の事故が多発したため新たに有志が集って再現したものだそうだ。

橋を渡る前の玉川上水にそった道を左側に入って五十メートル行った左側がこんもりと山になっていて木が茂っている所がある。ここが金比羅山だ。もとは江戸時代に流行した「富士山信仰」の富士塚(富士見町にもある)ではないかと言われているが、一八五四〜一八六十年の間に砂川村の名主・砂川家が願主となり、頂上に「富士浅間」中段に「金比羅大権現」その下に「秋葉神社」を勧請したと伝えられている。金比羅大権現は舟の神様で、かつて玉川上水では水上運送が行われていたので無事を祈って建てられたものであろう。

さらに金比羅山から西に行くと水上運送が行われていた巴河岸の跡がある。このあたり一帯は緑が多くそぞろ歩きには最適である。去年から水もたっぷり流れていて、かつての玉川上水を思い起こすことも出来るだろう。

さらに西に進むと昔砂の川と呼ばれた残堀川と交差する。砂川の名前の由来はこの川がよく氾濫してそのたびに砂を運んで来たことによる。

砂川三番の交差点に戻って五日市街道を西に行くと大山道入口がある。

この碑については本誌7月号で触れているが、車がぶつかって三つに壊れてしまった石碑を横目に西に行くと左側に流泉寺がある。新田開発を進めた農民たちの心の支えとして一六五十年に建立、一六五四年に開創された。宗派は臨済宗建長寺派。明治時代には境内に、約30年にわたって学校が設けられ、村の子供たちの教育が行われた。記念の石碑が入口右手に建てられている。子供たちの声が今も聞えてきそうな気配がする。

急ぎ足で廻った歴史散歩だが、時間をたっぷりとって、のんびり歩いてみることをお勧めしたい。特に去年から水が満々と流れるようになった玉川上水ぞいの道は、爽やかだ。武蔵野の昔の姿を想いおこしながらのそぞろ歩きは格別であろう。

この立川にも新しい住人が年々に増加しているが「わが街」を知る喜びは、まず歩くことからではないだろうか。

遠い昔の人々の生活に思いを馳せれば、新しい明日が見えて来るような気がする。

◀金比羅山

▲阿豆佐味天神社

◀流泉寺〈学校発祥の碑〉

真夏の冬景色

編集とは、つくづくおかしな仕事だと思う。この炎天下で、もう冬のことを考えている。なにか物事の「先見性」があるようでいて、その実そうでもないのは多分、夏には「夏」を本腰をいれて見据えていないからであろう。

理屈はさておき、夏に冬景色をこころのファインダーからのぞいているのは、一種の「職業病」ではないだろうか。今年の「ベスト立川人・展」に登場していただく方は、何処のどなたであろうかと想いをはせ、来年のカレンダーはどういう趣向のものが立川人に喜んでいただけるかなどと考えている時に「こんな人が立川にもおりますよお」と声を掛けてくださる方がいる。

額の汗がさあっとひいて、一陣の風が心身を癒してくれる。編集作業のおおむねは「雑務」だが、こういう「温かい声」が届けられる職業は、ほかにメッタにないのではないかと思うとき、マンザラでもないなあ、とひとりごちる。

「読者に支えられて」とは、よく編集者が口にすることである。だが、ほんとうにそれを実感する機会がいつも訪れているわけではない。この「15万都市」立川ならではの「反応」は、ほかではちょっと得難いものである。(立井啓介)

漢字テスト⑲

空欄に一字挿入を試みよ。

見縫挿□

□面玲瓏

真如苑だより

向日葵が燃えるように咲いております。真夏日がつづく昨今、あの生命力が欲しいものと痛感いたします。

真如苑では緑の風をご用意して、皆さまのお越しをお待ち申しております。

■日時　8月29日(土)
午後2時〜4時

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

■立川市民(成人)に限らせて頂きます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」(本誌を手渡してくれた人)へ。

立川のモニュメント・7
甲州街道▼道標

甲州街道というと、現在は、日野橋を渡り八王子へ向かう道を指すが、もともとは、錦町五丁目市営プールの東側にある道が、そうだったという。

この道は夏ともなれば、プールにやってくる子ども達であふれる道だが、いつもは、それほど人通りは多くない。むしろ、閑静な道である。それが「街道」だったとは。

その甲州街道と、拝島、五日市方面への分岐点に「道標」はあった。市営テニスコート横の、小松旅館の庭先にあったという。おにぎり形の自然石には「右、はいじま・五日市みち」「左、甲州道中」と刻まれている。

この道標がいつ、どのような由来で立てられたのかは、残念ながら、わからない。道標は一時、立川市役所入口に置かれていたが、昭和六十年に、歴史民俗資料館に移された。

街道を旅人や飛脚が急ぎ足で歩いて行ったのか、こうした江戸の道標を眺めていると、その足音が聞こえてくるような気がする。(H・H)

甲州街道と拝島、五日市方面との分岐点に立てられていた道標。だが、残念なことに、その由来は、現在では全く不明である。

たちかわ伝言板

第六回 立川まつり
7月25日(土)
1時/トライアスロン 昭和記念公園大会
2時/'87 ミス立川 コンテスト
7時半/花火大会

立川諏訪まつり ご案内
8月22日(土) 前夜祭
1時・4時/マスクマンショー
7時/民謡流しおどり
8月23日(日)
みこし出車の大パレードなど、催もの多数。

工房から

●雑誌「季刊・東京人」が隔月刊に変更された最新号で「月刊えくてびあん」を掲載してくださっている。それか、あらぬか、都心のいくつかの文化施設から「資料として保存したいから毎号おくれ」というご命令。わが「えくてびあん」はそんなにブンカ的なのであろうか。●先月号の「ガリバー」の写真は吉田義治(本誌)の作品だが、これも滋賀県庁から借用の依頼が編集部にきている。「遠くまで出張撮影した甲斐があった」とは吉田の弁。●世の中には名前がない店があるということを今回の「看板」の取材をしてはじめて知った。名を被せずに商う、堂々たるキモッタマであります。●白眼に 月光しみて えくてびあん

(編集) 石塚敦美 小川知子 神山清子 隅川瑞 田中恵子 原田礼子 平沢正弘 東島弘子
(写真) 天野武男 板橋一明 吉田義治 スタジオ259

月刊えくてびあん 第37号
昭和六十二年八月一日 発行
発行所 えくてびあん編集工房
東京都立川市柴崎町2-4-11 ファインビルディング3F
電話 〇四二五(28)0082
編集人 立井啓介
発行人 沖野嘉男
印刷所 株式会社 立川印刷所

漢字テスト・答

見縫挿針

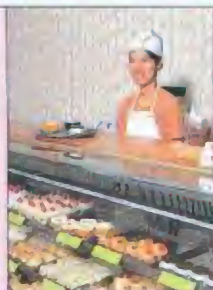
八面玲瓏

ANOKO♥KAWAIYA

立川 看板娘 ②

食品を扱う看板娘の皆さん、笑顔がとても良く似合う。暑い中でも笑顔が爽やかな風を心の中に送り込んでくれる。

枝窪美和さん
寿屋酒店(錦町2丁目)

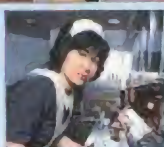
人と話すのが好きという明るい性格の女子大生。卒業後は店を継ぐというしっかりした意志をもっている。

佐藤梅美さん
マリアン(高松町2丁目)

店に出て売るだけでなく自らケーキを作る。さらに腕を磨くために料理学校で勉強中という。これからが楽しみ。

堤　優子さん
堤屋(柴崎町2丁目)

お店に立ったり、料理をしたりと忙しい中でも茶道を習いに行くゆとりを忘れない。

宮本敬子さん
ミールデイール(曙町2丁目)

ちょっとオシャレなアイスクリームを売る店で、気さくな接客が人気の宮本さん。

日向まつ江さん
杉田菓子店(栄町5丁目)

いつもニコニコと、良く動く。お客さんが商品を探していると自ら取って来る心配りに信頼もあつまる。